

## 夫の肺がんが再発したが、最期の時が来たら苦しませたくない

相談者の夫は肺がん再発により抗がん剤治療中。夫の思いを尊重しながら、「やれることはやらねば」という思いで治療を続けているが、最期の時のことが心配だという。

### 1 相談内容 70代女性 肺がんの夫の相談

20XX年にK病院で夫（70代後半）が肺がんと診断された。そこから家族がH専門病院での治療を勧め、そこで右肺下葉切除手術を受けた。その後、経過観察のため、通院のアクセスを考えた病院を紹介してもらうことになり、主治医はN病院を紹介すると言い、家族はそれに賛成した。しかし、夫は最初にお世話になったK病院がよいと言うため、本人の意思に従った。

昨年末にPET-CT検査で右肺上部に1箇所再発がわかり、放射線治療（40回）を受けて落ち着いたが、今年6月に右肺上部に転移が1箇所、その他にもその近辺にポツポツと転移が見つかった。そこで先日から入院して1回目の抗がん剤治療が始まったが、脱毛すると言われている。

夫婦共々、「やれることはやらねば」という思いで治療を受けている。

今の悩みは、夫も自分自身も、もし最期の時が来たら苦しめないようにしてほしいことである。また余命はどのくらいだろうか気になる。

### 2 相談内容のポイント

- 1 通院の病院選びで、主治医はN病院を紹介し、家族はそれに賛成。しかし、夫は最初お世話になったK病院がよいと言い、本人の意思に従った。
- 2 今の悩みは、夫も自分自身も、もし最期が来たら苦しめないようにしてほしいことである。
- 3 余命はどのくらいなのか気になる。

### 3 ピアサポーターの対応のポイント

- 術後の病院選びでご主人の意思を尊重されたことは、ご家族全員が素晴らしい選択をされたと思うと伝え、私たちピアサポーターも治療に関することは自分で選択することにより、後悔を残さないようにしていると話した。
- 今は医療が進んでおり、がんの痛みの緩和に関してはかなり進歩している。モルヒネなどを処方されても、痛みがある場合は中毒にはならないと言われており、我慢せず痛みを訴えたほうが生活の質が良くなり、その方ががんと上手く付き合っていると話した。そのことをご主人にもぜひ伝えていただくよう話した。
- 余命については、我々素人には全く分からない。医師に聞いたとしても平均的なことは答えてもらえるかもしれないが、それはあくまでも平均値で、医師ですら実際の所はわからないと聞いたことを話した。私たちの仲間でステージIVと言われても10年頑張っている人もいることを伝えた。

## 4

## ピアサポートの結果

最初は何を話して良いか分からないと言いながら相談に入ったが、結局、ご主人の病気の経過から今の悩みまで全てお話しただけだ。

さらに、最後にはご自身も乳がんであることを明かされ、それに関する話も聞きたいと言われ、次回の院内サポート時に乳がん体験者のピアサポーターとお話いただくこととなった。

## 5

## 対応したピアサポーターの所感

夫婦ともに70代の後半で、それぞれがんを抱えているということが身につまされた。最期の時のことを心配される心情がよく理解できる。ピアサポーター自身も、夫婦ともにがんの、高齢の親戚をサポートしているが、親族として同じ思いを抱く。

ただ励ますだけでは、相談者の不安の緩和にはならない。根拠となると知識や情報が必要だと再認識した。これらを相談者の理解を助けるためのツールとして使い、医療介入にならないように提供していく必要がある。さらに研鑽を積みたいと思う。

## 考察

## この事例から学ぶこと

相談者の言葉の背景にある気持ちや問題を考えながら、必要に応じて医療・福祉関係者と連携したり、適切な相談窓口につなぐ。

## 【事例の背景と課題・ピアサポーターに必要な知識や情報】

夫は放射線治療後、半年という短期間で病状が進行し、新たな治療が開始されている。このことから、今後、どのような症状が出現するのか、「やらねば」という気持ちで治療を受けているが、このまま続けてよいのか、副作用は大丈夫なのか、看取りが近いのか、など、先の見えないさまざまな不安が妻にある。そのため気持ちばかり焦ってしまう様子がかがえる。さらに、相談者自身も乳がんであり、夫と自分を重ね合わせてしまっていることも考えられる。妻自身の心配もあるが言い出せない背景もあるのではないかと。

ピアサポーターは、夫や妻の体調、妻以外の家族の存在、がんについて（ここでは肺がんの基礎知識）、患者・家族と主治医との関係性、ピアサポート以外の相談窓口などについて知っていることが望まれる。

## 【講評】

ピアサポーターは、相談者の話を全て聞き、内容の一つずつに親身に丁寧に対応されており、相談者は安心して相談できたのではないかと。相談者の話を否定せず、聞くこと、分からないことは分からないと伝えていることは良いと思う。

課題としては、ピアサポーターの主観や自分の見解を話している場面（例えば、ご主人の意思を尊重したことを素晴らしい選択と言い切ってよいのか、相談内容を考えると選択したことを悩んでいるのではないかと。相談者がいう「苦しまないこと」を痛みについての話しにしているが、本当に身体の痛みのことなのか）があり、相談者が知りたい情報、相談したい内容と違ってしまいうこともあったということ、常に意識しながら相談対応にあたるようにすると、さらに良いピアサポートに繋がると思う。話の内容を相談者と一緒に整理しながら、言葉の背景にある気持ちや問題は何かを考えると、相談者が本当に相談したいことが見えてくると思う。

具体的に相談者が知りたい内容が何であるかがポイントとなる。例えば、具体的な療養先、脱毛以外の抗がん剤の副作用のほか、医療者との面談の希望があれば、医療・福祉関係者と連携していくことが必要となるため、ピアサポーターと病院とのパイプ役が院内にいるとスムーズである。